

自己心理学の観点から見たキレル現象について

—自己対象体験, 自己愛的抑うつ, 自己愛的憤怒との関連—

“Kireru”phenomenon from a self psychological point of view
—Selfobject experiences, narcissistic depression and narcissistic rage—原田 奏江
Kanae Harada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : キレル現象, 自己心理学, 自己対象体験, 自己愛性抑うつ, 自己愛的憤怒

Key words : “Kireru”phenomenon, Self psychology, Selfobject experiences,
Narcissistic depression, Narcissistic rage

1. 研究目的

近年, 青少年が衝動的・破壊的行動をとる“キレル”現象が問題視されてきた(宮下ら, 2002).

“キレル”という言葉は, 我慢の限界で爆発する激怒を意味する事もあるが些細な不満感を表す事もあり, 単に他者へ向く「制御不能な激怒」だけでなく, その怒りが自己に向く「抑うつ的な負の感情」も生起する包括的概念である(竹端ら, 2010).

これらの類似概念で, Kohut の自己心理学的観点に自己愛の傷つきやすさを示す自己愛的憤怒と自己愛性抑うつがある(上地ら, 2004). 彼のいう「自己に役立つべく利用される自己対象」との体験で自己愛が十分満たされないとその後も誇大的欲求が生じる. それが更に満たされない時, 制御不能で解消されない自己愛的憤怒や, 憤怒が自己へ向けられる自己愛性抑うつが生じると考えられる. そして宮下ら(2002)は, “キレル”現象の感情面は憤怒や抑うつ of 精神病理学的形態も含むとし, 特に抑うつに耐えられる力の発達を重視している.

そこで, 本研究では, Kohut の自己対象体験と自己愛的憤怒・自己愛性抑うつに着目し, “キレル”現象の感情面における生起過程の一部を明らかにするため, 探索的に量的研究を行った. 即ち, 探索的仮説として, ①「過去の自己対象体験→自己愛人格→キレル時の感情」, ②「現在の自己対象体験と自己愛人格の交互作用(組み合わせ)→キレル時の感情」を想定した. なお, 自己愛的欲求が高く, 怒りの表出抑制により抑うつを示しやすい女性を調査対象とした(上地ら, 2004 等).

2. 研究実施内容

2-1. 方法

調査対象者: 青年期以降女子大学生・院生 255 名(平均 22 歳). 調査時期: 2017 年 7 月 12 日-10 月 31 日.

調査方法: 集合・委託形式の質問紙調査(表 1 参照).

表1 質問紙の構成と調査内容

1	フェイスシート(教示文, 回答方法など)
2	[設問1]自己対象体験尺度(緒賀, 2001; 小林, 2006より改定): [設問1-1]回答者に「自分にとって人生の中で最も影響を受けた人」を想起させ, 人物の選択肢の中から, 一人だけ想起した人を選択させた. [設問1-2]設問1-1で想起した鏡映(例:自分に何か嬉しい事が起きた時, それを我が事のように喜んでくれる人)・双子(例:自分と共通した考え方や思いを抱えていると感じる人)・理想化(例:自分にできないことができ, その人を知っていることに誇りを感じられる人)との自己対象体験を尋ねた. 計16項目, 3件法.
3	[設問2]自己愛人格尺度(NPS, 谷, 2004)の「自己愛的憤怒(例:自分の意見を少しでも否定されると, すぐ頭に来る)」と「自己愛性抑うつ(例:ちょっとしたことで自信をなくし, 落ち込んだりする)」の2因子. 計17項目, 7件法.
4	[設問3]キレル時の感情尺度(竹端ら, 2010): 「感情制御不能(例:周りが見えなくなってしまう)」と「負の感情(例:虚しくなる)」の2因子. 計22項目, 5件法. 注)回答者の精神的負担を考慮し, 教示文でキレル時を「普段のちょっとしたイライラやムカつきを感じた時」と定義し想起させた.
5	[設問4]年齢 その他, 意見・感想

2-2. 結果

[設問1-1]人物の分布は, 順に, 母親 49.4%($n=126$), 友人 10.2%($n=26$), 先生 8.6%($n=22$), 父 6.3%($n=16$), 恋人・メディアを通じて知っている人 4.3%($n=11$), 兄弟姉妹 3.9%($n=10$), 先輩 3.5%($n=9$), 祖父 2.7%($n=7$), 祖母 2.0%($n=5$), その他の知り合いの人 1.2%($n=3$), 親戚 0.8%($n=2$), 後輩は無回答であった. そこで, 約半数の割合を占めた「母親」と,

身近な他者としてまとめた「友人・先輩・恋人」(N=45)カテゴリーについてのみ、各分析を行った。過去の自己対象体験→自己愛人格→キレた時の感情(重回帰分析結果, 下図 1 参照):

自己愛人格とキレた時の感情との関連(①~④パス): ①~③のパスは, 全対象者と主要人物カテゴリーで共通した。即ち, 自己愛的憤怒から感情制御不能($\beta=.29, p<.001$ 等), 自己愛性抑うつから感情制御不能・負の感情へ正の影響が見られた($\beta=.35, \beta=.53, p<.001$ 等)。一方, 全対象者でのみ自己愛的憤怒から負の感情へ負の影響が見られた(④パス $\beta=-.16, p<.05$)。

自己対象体験とキレた時の感情との関連(⑤パス): 全対象者でのみ, 双子自己対象体験から負の感情へ正の影響が見られた($\beta=.13, p<.05$)。

自己対象体験と自己愛人格, 及びキレた時の感情との関連(⑥パス): 「友人・先輩・恋人」カテゴリーでのみ, 理想化自己対象体験から自己愛性抑うつを経て感情制御不能・負の感情に対する一連の正の影響が見られた($\beta=.41, p<.01; \beta=.30, p<.05; \beta=.41, p<.01$)。

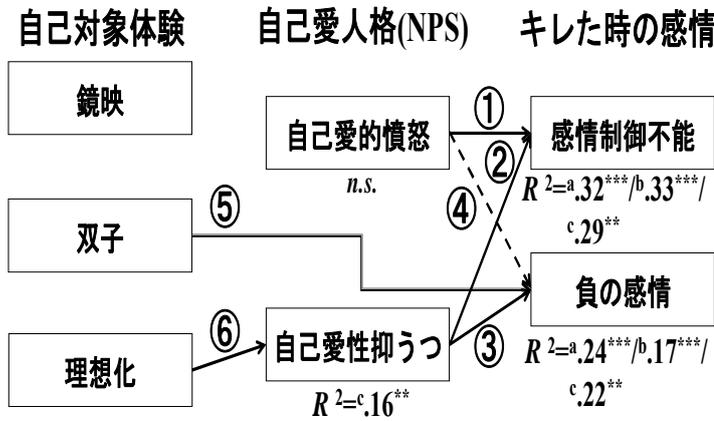


図1 全調査対象者と、「母親」及び「友人・先輩・恋人」カテゴリーにおける自己対象体験が自己愛人格(NPS)を経てキレた時の感情に及ぼす影響についてのパスダイアグラム
注) ** $p<.01$, *** $p<.001$ 実線: 正の影響 点線: 負の影響
説明率: ^a全調査対象者 / ^b「母親」カテゴリー / ^c「友人・先輩・恋人」カテゴリー

現在の自己対象体験と自己愛人格の交互作用(組み合わせ)→キレた時の感情(分散分析結果):

全対象者と主要人物カテゴリーにおいて, 自己対象体験と自己愛人格間でのキレた時の感情得点の差を検討した。結果, 負の感情について, 自己対象, 鏡映高低により結果に相違があったが, 自己愛性抑うつ高群の方が低群よりもキレた時に負

の感情が高かった($F(1, 248)=31.01, p<.001$ 等; 右図 2 参照)。また, 理想化高低に関わらず, 自己愛性抑うつ高群の方が低群よりも感情制御不能得点が高かった($F(1, 250)=26.42, p<.001$ 等; 右図 3 参照)。つまり, 自己愛性抑うつ高群で, キレた時により情緒的に混乱しやすい傾向が認められた。一方, 鏡映高, 自己愛的憤怒高群が負の感情は高く, 鏡映低, 自己愛的憤怒低群の方が負の感情は高かった($F(1, 41)=7.59, p<.01$ 等; 下図 4 参照)。つまり, 鏡映, 自己愛的憤怒については交互作用により, 負の感情が逆の結果となり一貫しなかった。

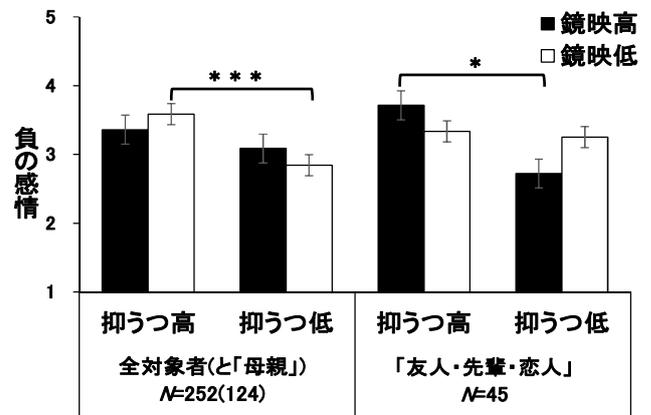


図2 全対象者(「母親」カテゴリー)と「友人・先輩・恋人」カテゴリーの自己愛性抑うつ高群, 低群における鏡映条件下での負の感情得点
注)* $p<.05$, *** $p<.001$

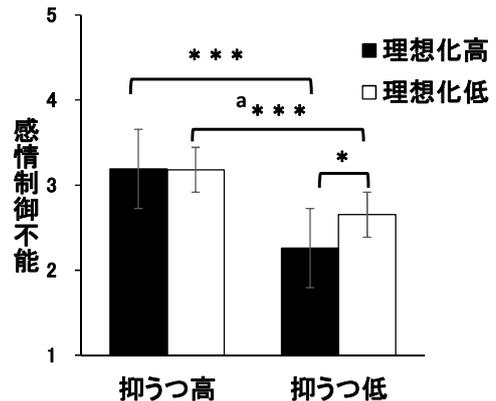


図3 全対象者の自己愛性抑うつ高群, 低群における理想化条件下での感情制御不能得点(N=254) 注)* $p<.05$, *** $p<.001$
aは「母親」カテゴリーでも共通。

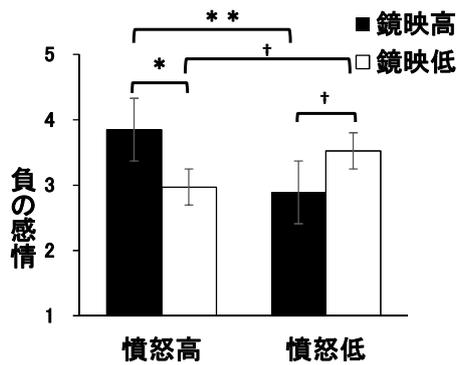


図4 「友人・先輩・恋人」カテゴリーの自己愛的憤怒高群, 低群における鏡映条件下での負の感情得点(N=45)

注) $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

3. まとめと今後の課題

以上より, 自己愛人格とキレた時の感情との関連では一貫した結果が得られた。ただし, 自己対象体験と自己愛人格との関連では予想に反した正の影響が見られた。また, 現在の自己対象体験と自己愛人格の交互作用(組み合わせ)では, 自己愛性抑うつ高群で情緒的に混乱しやすい傾向が見られたが, 自己愛的憤怒では結果が一貫しなかった。

つまり, キレた時の感情は, 過去と現在の自己対象体験の両方が自己愛人格を媒介して影響する可能性が示唆された。そのため今後さらなる検討が必要であるが, 少なくとも自己対象体験と自己愛人格から“キレる”現象の一部は説明され得ることが示唆された。青年期以降の一部の女性は,

幼児期に安心感をもたらす自己対象体験が十分でない抑うつが高く, それを緩和させる自己対象を希求し続けるものの, 自己愛の脆弱さで適度に自己対象を利用できない。そうした人が, キレた時に情緒的混乱を示しやすい可能性が考えられる。

今後の自己対象体験と自己愛の病理の検討では, ①より発達早期の自己対象との体験を明確に尋ねる事, ②健全な野心・有能感や自己主張性を表す自己愛の誇大的側面も含めて自己対象体験との関連を検討する事が必要であろう。

付記

本研究は, 大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2928)「青年後期女性のキレる現象について—自己愛的脆弱性と自己対象体験の観点から—」と, 大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認(受付番号 29-011)を受け行ったものである。

主要引用文献

- [1] 上地雄一郎他 (編) 小塩真司他 (2004). もろい青少年の心——自己愛の障害 北大路書房.
- [2] 宮下一樹他 (編) 青木 一他 (2002). キレる青少年の心——発達臨床心理学的考察 北大路書房.
- [3] 竹端佑介・永田陽子 (2010). 大学生における「キレ」行動と「キレ」感情に関する研究——質問紙からの検討 駒澤大学心理学論集, 12, 7-12.